



私の伴走者

もうひとりの伴走者
—ふるさと山・海・空—

らゆる場所
に出かけて
いく。いわ
ばジプシー
型学童保育
だ。

当時は学
校週休二日
制が始まっ
た頃で、特

札幌学院大学に赴任して二度目の春を迎えている。新天地にも慣れて心にくらか余裕ができたのか、今年は学内で新入生の初々しい姿を見かけるにつけ、ぼんやりと自分の学生時代を思い出してしまふ。

白状すれば、当時の私は大学の講義に対してあまり熱心な学生ではなく、手持ちの時間と労力の大半を「障害児学童保育」に充てていた。学童保育といっても自前の建物はなく、集合場所はパチンコ屋の前のバス停。そこから市バスに乗って、植物園、プール、児童館、大型公園、河川敷、お寺の裏山―ありとあ

に障害のある子どもとその家族は長い休暇の過ごし方に頭を悩ませていた。障害があるからこそ、家に籠もりきりになるのではなく、地域で多くの人と知り合っているいろいろな経験を積み重ねていきたい。親たちのそんな願いから産声を上げた学童保育。私が指導員になったのは、ちょうど設立一周年を迎える頃だったと思う。障害のある子どもにも「家庭」「学校」に次ぐ第三の場所を、地域での豊かな放課後が豊かな発達を保障する、を合い言葉に、当時二十歳前後だった私は子どもたちの居場所づくりに燃えていた。

「一拍ずつクレッシェンドを利かせた聞き覚えのある声に振り返ると、予想通り声の主は濃紺のスーツに身を包んだSくんだった。乗り物が大好きで、学童保育の移動時に目を輝かせてバスの最前列を陣取っていた彼は、現在毎日そのバスに一人だけ乗って、仕事先の作業所に通っているという。」

「元気やったよ。Sくんもすっかり大人になったなあ。私と背変わらんやん」

「飲んでる、かつ？」と満面の笑顔でお酒をついでくれるSくん。

「飲んでる、飲んでるよ」

その杯を飲み干しながら、私はやっと気づいた。あの頃、私は子どもたちの居場所をつくろうと張り切っていたけれど、その時間の裏側で、子どもたちこそが私の未来の居場所をつくってくれていたのだ。思わず涙がこぼれそうになった。長い時を経て目の前にいる〈元・子どもたち〉が私の〈いま〉を照らし、人生に意味と実感を与えてくれることに対して。

私は常日頃、発達研究者として保育現場で子どもを観察し、大学の講義では「発達」や「支援」について語っている。だが、Sくんたちに再会して以来、心の中にこう問いかける声がある―人と人が出会い共に生きることの意味、人が人を支えることの意味をちゃんと捉える研究をしているか。「発達」や「支援」を一面的に描いていないか。

〈元・子どもたち〉の声色に似たその声は、研究者としての私の大切な心強い伴走者である。

Fujino Yuki

藤野 友紀

学生体験記

韓国・釜山への留学

「何か、自分自身に誇れる経験をした」とこれは、私が大学入学当初から抱いていた気持ちであり、目標でした。

留学の大きなきつかけとなったのは、二年生の秋に、韓国・東亜大学との一週間の交流プログラムに参加したことです。二年と韓国語を受講していたこともあり、先生や教務課の方々の協力をいただき、四ヶ月間の韓国留学を実現させることができました。

二〇〇八年九月から十二月末まで、釜山・東亜大学で交換留学生として勉強しました。留学生専用のクラスに入り、週に四日、四時間ずつ韓国語の授業を受けました。授業は全て韓国語で行われるため、最初は聞き取ることができず、とても苦労しました。そして韓国語の他に、日本語学科の授業にも参加し、日本語を教える立場も経験しました。毎日がとても新鮮で、他国の留学生と辞書を片手にたく

さん会話をしました。

しかし時には、思うように言葉が通じない悔しさや、日本を想つての寂しさなどから、涙を流すことも多かつたように思います。それでも最後まで諦めずに頑張れたのは、韓国で一緒に勉強している仲間や、日本で応援してくれている人たちがいたからです。私の母が、家族全員の手紙を送ってくれたとき、改めて家族の温かさを実感しました。大学卒業後も、韓国語は継続していきたいと考えています。



入学当初の目標を達成できた今、私の新しい目標は、もっと世界への視野を広げ、国際的に通用する人間になることです。(人間科学科四年)

杉尾 香織

沖繩への国内留学

沖繩国際大学への国内留学では、総合文化学部日本文化学科に所属し、琉球歌謡に詳しい狩俣一先生にお世話になりました。狩俣先生のお話になりました。熱心な指導をいただきま

した。南島の葬祭儀礼は大和のものとは対照的で、骨を重要視する洗骨という風俗があります。かつては頭蓋骨を直接洗って清めていた、先祖をじかにいたわる興味深い風俗であり、感銘を受けました。また、ある一族の十三年忌法要を見学させていただく機会を得たのですが、二百人を超える人々で行われる法要は圧巻でした。法要の最中には琉球舞踊が披露されるなど、賑やかで、大和との違いを痛感するとともに、死とは何かについて考えさせられました。

沖繩には古い時代からの民間信仰が多く残るといいますが、想像していたよりも遙かに多い



ことに驚かされました。国家の安泰や一族の繁栄を願う聖地である御嶽が数多く存在し、神がかりしたと思われる巫女が拜んでいるのを見かけることもありました。沖繩でできた友人たちと、ときにはハブに気をつけながら、多くの御嶽を回りましたが、石灰岩でできた御嶽や、ガジュマルの茂みの奥にある御嶽は神秘的でした。

そうした中、平和問題についても考えさせられました。沖繩では毎日のように不発弾が見つかりますが、そうしたことは大和ではあまり知られません。沖繩国際大学の隣の普天間基地も、夜中まで轟音を立てた戦闘機を飛ばすことがあり、恐怖心を抱かずにはられません。

沖繩への国内留学は、僕にとって、生きるとは何かを考え出すきっかけになったように思います。良い意味も悪い意味も含め、夢を見ているような時間でした。

(人間科学科四年)

高橋 史弥

半期海外留学 in AUS

帰国の五日前、私はメルボルンで行われたダンスバトルに参加しました。急遽、参加することになったので、かなり緊張しました。海外でのバトル、めつたにできない機会だからムダにしたいくない。おもいきり踊って楽しもうと思いました。

いざ始めると緊張も忘れ、ただその空間を思いきり楽しんで踊ることができました。一緒に踊った相手も、相手チームも最高の踊りをして、最高のバトルになりました。終わった後、見ていたオーディエンスの人達や審査員、応援してくれた友達か「You良かったよ」と声をかけてくれました。この経験で私はダンスに国境はないのだと確信しました。外国人と日本人は体格も言葉も文化も違うけど、おもいきり最高のダンスをした時、国に関係なく共有でき



るのだと感じました。良いものは、良い！ただそれだけなのだと思います。

私はこのバトルに参加して、自分もできるという自信がつき、もっとダンスが好きになり、今もおもいきり楽しんで、もっと踊っています！

初めての海外、日本と全く逆の季節、自然の美しさ、ファミリーとの生活、英語だけの授業、他民族国家、旅行、友達や周りの人達との繋がりが、一日一日がとても濃く、沢山のことを経験し体感し最高のオーストラリア生活を送ることができました。ホストマザーやスタッフの皆さん、友達、先生、出会った人達、そしてオーストラリアへ行かせてくれた両親、兄に心の底から

感謝しています。

(英語英米文学科三年)

長谷川由樹

大学院への進学体験記

高校生の時に臨床心理士という仕事を知り、この学問に興味を持ちました。そして臨床心理士養成のための第一種指定大学院のある札幌学院大学を選びました。幅広い知識を自分のものとし、学内特別選抜入試を受けるためにも、授業に取り組んでいきました。

しかし、大学生活も慣れてくると緊張感が無くなってきたてしまいました。そこで、友人と共に心理学を学ぶサークルを立ち上げ、知識を教えられるだけではなく、教える立場ともなる場を作りました。それにより進学へのモチベーションを維持できました。三年次からは、心理学系大学院の入試問題に取り組むなど、受験に必要な英語を勉強し始めました。受験する大学院を決めるには、どの先生のもとで勉強したいか、また二年間の短い大学院生活をどのように送るかを考えました。三年次の終わり頃から、友人たちの就職活動が始まると不安が強くなりました。内定が出て将来が決まっ



四年の小木曾准也君に、そのときの体験記を書いていただいた。(小出 良幸)

特別支援学校の教育実習という貴重な体験を

ていく友人を見ていると、まるで自分が停滞しているかのよう感じていました。また、大学院受験を目指して勉強を続けてきた友人たちが、就職へと進路を変えていくこともありました。さまざまな不安の中ゼミの先生や友人らに支えられ、本学院に学内特別選抜入試で合格することができました。大学院では、専門的知識、態度を身につけ、修了後は、心に困難を抱えた方々が生きやすくなるよう、支援する仕事に就きたいと考えています。

(臨床心理学研究科一年)

小林 愛美

特別支援学校での教育実習体験記

子ども発達学科の第一期生が、昨年と今年にかけて特別支援学校で教育実習をおこなっている。いち早く実習を終えた、

させてもらった中で、本当に様々なことを学ぶことが出来ました。特別支援学校での教育実習は、十月十四日から十月三十一日までの十七日間という短い期間でした。私にとつて初めての教育実習でもあり、行くまでは、実習現場がどのような雰囲気か全く想像ができず、少し不安がありました。教育実習が始まるとそういった不安はなくなり、本当に毎日が充実し楽しく過ごせることが出来ました。教育実習を楽しむことが出来たのは、実習担当の先生をはじめ、多くの先生方から様々なアドバイスをいただいたこと、現場の子ども達が素直で元気で可愛く、そして私に深くかわってくれたからです。特に私が担当した四人の子ども達は、昼休みの時間になると、私を体育館のトランポリンまで連れて行き、休み時間が終わるまで一緒に

に遊ぶのが日課のようになっていました。

教育実習で私は、人生で初めての授業を行うことになりました。授業を始めるまでに教材研究や授業の構成を考えていたにもかかわらず、初めての授業は私が想像していたものとは全く違うものになってしまいました。そんな経験もあり、最後の研究授業の時は、臨機応変に授業を進めることが出来たと思います。

今回の特別支援学校での教育実習は、私の大学生活の中で忘れられない体験の一つになりました。私を教育実習生として受け入れてくれた実習校には、本当に感謝の気持ちで一杯です。(子ども発達学科四年)

小木曾准也



2008年度学部教員の人事、研究活動等

(10/1/4/1)

◎教員の異動

▼退職 (三月三十一日付)

●酒井 恵真(地域社会学)

●笹岡 征雄(スポーツ)

●川瀬 裕子(アメリカ文化論)

●Andrew Johnson(英語)

▼採用 (四月一日付)

●専任

●教授 横山登志子(相談援助の基盤と専門職)

●准教授 二通 諭(特別支援教育総論)

●准教授 眞田 敬介(英語音声学)

●講師 眞田 敬介(英語音声学) 札幌学院大学非常勤講師

●教授 牧野 誠一(障害児・者教育論)

●昇任 (四月一日付)

●教授 平体 由美(准教授)

●准教授 山越 康裕(講師)

留研を終えて

平成二十年四月一日から一年間、アメリカ合衆国テキサス州オースティン市の Center for Therapeutic Assessment に客員研究員として留研してきました。貴重な機会を与えてくださった奥谷人文学部長と布施学長、そして快く送り出してくれた臨床心理学科の先生方には本当に感謝しています。本項では、留研生活で感じたことを記したいと思います。

まず、はじめに感じたのは、人の悩みに国境はないということでした。とても美しく、音楽の才能にも恵まれているのに高校で居場所のない思いをしている学生や、危険だとはわかっているが、危険だとはわかっていても不特定の性関係でしか満たされない青年、あるいは家庭



内の様々な暴力のために誰が子どもを守ればいいのかよくわからなくなっている家族など、ケースの概要やそこで当事者が感じる気持ちについては、たとえ英語に自信がなくても十分に推測することができました。数値化された心理検査のデータの読み方は、どの国でも変わらないということも関係していたかもしれません。つまり臨床をやっていく上での基礎は、日本もアメリカも変わらないということです。

一方、大きな違いを感じたのは、研究にまとめていくスピードです。Centerの創設者である「EJ」教授の紹介で、テキサス大学オースティン校における研究プロジェクトに参加する機会を得たのですが、先週プレゼンされたパワーポイントが翌週には草稿になっているのはびっくりしました。また大学院生を「ケース担当」「ビデオ記録

など後方支援」「文獻レビュー」「逐語記録」などそれぞれのチームに分けて、臨床と研究を同時に進めていく手法からも学ぶことが多かったです。ラフであっても進んでいく、テキサスの

開拓者魂が生きているような気がしました。北海道も開拓の大地です。私

(橋本 忠行)

二〇〇八年度 二〇〇九年度

学位記授与式 入学式

二〇〇八年度学位記授与式が、三月十九日、北海道厚生年金会館ホールで挙行された。二九回を迎えた人文学部では三二八人(人間科学科一三九人、英語英米文学科八二人、臨床心理学科九七人)に学士(人文学)号が、八回を迎えた大学院臨床心理学研究科では十人に修士(臨床心理学)号が授与された。全学では学士号授与者九一五人、修士号授与者三三八人であった。

総数は、六、六四四人(人間科学科 四、二〇二人、英語英米文学科 一、九三四人、臨床心理学科 五〇八人)となり、大学院臨床心理学研究科修士生の総数は、八〇人となった。

また、二〇〇九年度入学式が、四月四日、学位記授与式と同じく北海道厚生年金会館ホールで挙行された。三三回を迎えた人文学部では四学科で三五五人が、十回を迎えた大学院臨床心理学研究科では十二人が入学した。



編集後記

人文学部報は、二〇一〇年三月発行の次号から、内容や形態が一新されます。その過渡期として、従来八ページあったものが、今回だけ四ページの変則的なものとなりました。人文学部創立三〇周年を契機に、人文学部報も大きく変わることになります。親しみやすく読みごたえのある内容を目指していますので、ご期待ください。

(編集委員長 小出 良幸)